



石門

心學子道語

初篇下

9  
3895  
3



門 09  
號 3895  
卷 3



佛も林も人ハるものとおどろふりつ己があつて  
大切の天命乃かゝるをきくこと孝身忠法乃及ん  
るふきふゆいの中へ意味が趣あつて心細ういその  
答も也。こゝに正字の力で辨げしる中へなるのどやか  
しや情業先生乃奇に  
人妻の心は細く細くして細く細くして細く細くして  
何でもいふあつてを精出してあつて居る。いふべき  
のであつて居る。心は細く細くして細く細くして細く  
我れに心とせぬ。あつて居る。いふべき。いふべき。

心學道結 卷下

早稲田 大學 圖書館  
號 27.6.16 史  
藏 書









孔子掃もたくの学者がくしやは己おのが為ために今の学者がくしやは人の為ために  
とてゆくゆくあさきと近ちかにゆくゆく程ほど白しろか

男おとことせぬと女房にようぼうは思おもふとせ。とらふ白しろか山やまのううみ

女房にようぼうごうりトやあねどもあねどもの指さしさ小人せうじんに。とらふとらふけ女房にようぼうの

中ちゆうに道みちはううみとやとといふいふが。とらふとらふ交けう交けうが出で来来ぬぬ友

ごうやごうやとといふいふもも程ほどくくもも世よらくらくももねねくく思おもふふととせせるるんんが

出でううけけててどどううももどどううねね。おおききににけけ任にん者者持もちち固こくくととああままも

精せい出でたた今いまもも信しんけけるる先せん程ほどくく乃すなはちちああもも持もちちつついいてて病びやうか

りりうう誰たれぞぞ養かめととううままののトトややのの又またおおききハハ親おやノノははくくも

おお思おもふふととるる主ま人にんノノののももととくくハハ負まかぬぬ中ちゆうにに初はつてて居いるる。

そのうそのうくくもも信しんももううくく書しよ学がく問もんもも精せいもも信しん也や。人ひとがが惑まどん

でもでも信しんととううままののトトややががどどううもも友とも乃すなはちち是これ那な辰ぢんハハ氣きが

せぬせぬのの世よ乃すなはちち人ひとおお月つきににががああいいののここいい指さしささ業ごうががちちととく

出でううけけてて己おのれとと信しんすすハハ。ととううまま現げん銀ぎんももいい乃すなはちち心こころががああぬぬトトや

それそれととたたととてて心こころ吐はきすすとと或あるおおのの丁ぢやう稚ぢ乃すなはちち長ちやう舌じゆつががととららう

長ちやう舌じゆつハハいいふふええややももくく内うち乃すなはちち中ちゆうにに世よ結むすくくいい長ちやうハハちちいい。

そのうそのうくくとと信しんももかかととううままもも信しんががせせいいくくゆゆくく指さしささととて

ぬぬ業ごう給たまふふののととううトトはは指さしささふふかかみみさんさんハハももああままハハああままてて。

ちちととてて信しんとと信しんとといいつつもも信しん不ふ行ぎやうハハ是これ那なハハ多た業ごう給たまふふ

道みちののととううトトかか場ちやうががぬぬとといいつつもも信しん不ふ行ぎやうハハ多た業ごう給たまふふ







尾中やうなるもの何とすあ阿房なるもやあいらも  
 ながおきハ加一とい。押れハ孝める。おきハ多ん  
 なるりきふ故て世なる人々を祖虫中々にえらぐ。い  
 どんと砂とつふるを去てぬゆ親乃教訓も親れ乃美  
 人も鳥の耳小風蛙乃つふふあて屋で河らあてあ  
 難減なるのトや。そとて親連ハほてなるりきなるあ  
 河の極純奴ハおきうほて長肉ハ人々よけてとや一も  
 仕申うが。ばくそ今おきくあ人々目とあさふたう。さそ  
 おもよするものもすけあ屋後ハ人の物小成て理例  
 死ととるてあらうとえの後すて棄トあつうあ

とうりぐ船親ハ様と出来一又親ハ胸を痛めて苦しんで  
 四なるりきと被抽純どのハあひ女乃を親ハ服ふつう  
 あ親の泣れハ月ふつうぬあんしよ精とりのトやう  
 あう一又炭控乃中かう名細のあ時きもあもの  
 トや或時その園北河領を掃う。玉中法氏教育のる  
 くと或んまれをそと四村で郡中也村の屋話と作付  
 きて村一の寺流や又ハ名を彼人乃あ一村中の男女と  
 呼おしてけむう乃乃屋ガ四座と。その時かの村も東  
 りきあの強寺で一七日のるを夜二層つ。勢れと  
 あり河領を掃う。河のせらるるりきバ娘なるり



形をくそ不孝の恥をくおそれのまはしくしきまきす  
 されば親をくすりのハ何うぞいものトやぬ親をく  
 涙を流して。さうゆゑあうかへい海國守極の法に徳  
 をん持するのく。さう方が。さういふ心よぬてまうとん。  
 とも押さく二人ハ今みても思ひあするハあいに  
 つく大ををあげていりまき。さける。そのとふ  
 母の乃つりくハハ中もその申うに俄さまのおるハ  
 やらさう肉の精がぞ孫つて若くより徳もてハ何  
 まいしあふ。とあぞ見づりぬ極して。今令して  
 是のしつりれま。さう後ハ及候の涙を流してあ

味ふんしあ親しつりものハ何うぞいものトやいひ  
 ぶが思ければ思ふてまきまひ長が若く又まを親乃  
 むひの体もるるしつりものハあ  
 子と親の事乃何のや親志をくも休む思親は  
 何のや親がくまが親の思あう。そへてあひ色せよ  
 更うる及候ハけろく。まは。けりせ。まきしてまは  
 及ハ日及るトやしつりものハあ  
 一このトや今まで何う思ふと思極びが皆何  
 あい物よぬて大極もやん及候いもやあふる。さう  
 天命の業が何う成てあて。是親の業。まは。とんら











むとつ曲者と打教しは舞ふりので心産うたは。  
 それで心まを修行しつゝまはとやされまは同と  
 んも大なる感心しつゝまは後その人も又その心  
 つゝまはしつゝまはの執心修行せしめて後まは  
 道徳とそ二の用友まはまはまはまはまはまはまは  
 隣とまはまはまはまはまはまはまはまはまはまは  
 大切に勤めつゝまはまはまはまはまはまはまはまは  
 するまはまはまはまはまはまはまはまはまはまは  
 まはまはまはまはまはまはまはまはまはまはまは  
 かけまはまはまはまはまはまはまはまはまはまは  
 かけまはまはまはまはまはまはまはまはまはまは

子あらずやと修しつゝまはまはまはまはまはまは  
 つゝまはまはまはまはまはまはまはまはまはまは  
 かに  
 長閑さよれいあれたるの神徳  
 かつらひ白くあつたりまはまはまはまはまはまは  
 又徳いどもいさつたりまはまはまはまはまはまは  
 りのでれがやけれは神徳も減る天窓ハ下げぬ  
 鳥トや一年三百六十日と只けなるとつゝまはまは  
 まはまはまはまはまはまはまはまはまはまはまは  
 せぬる孔子も弟も弟も弟も弟も弟も弟も弟も弟も弟も

心學道言 卷下 十六  
<sup>かた</sup>難と<sup>さ</sup>え<sup>し</sup>て<sup>む</sup>事と<sup>は</sup>及<sup>す</sup>と<sup>何</sup>ゆ<sup>で</sup>も<sup>教</sup>と<sup>み</sup>  
<sup>こ</sup>み<sup>の</sup>心<sup>を</sup>と<sup>も</sup>の<sup>事</sup>と<sup>も</sup>と<sup>あ</sup>せ<sup>よ</sup>と<sup>あ</sup>せ  
<sup>ら</sup>ま<sup>し</sup>。ど<sup>も</sup>ど<sup>も</sup>互<sup>に</sup>互<sup>に</sup>の<sup>心</sup>の<sup>し</sup>れ<sup>と</sup>や<sup>ら</sup>ん。た<sup>ら</sup>ん  
<sup>ら</sup>ん。つ<sup>の</sup>曲<sup>者</sup>と<sup>返</sup>治<sup>し</sup>て<sup>一</sup>生<sup>を</sup>安<sup>楽</sup>の<sup>く</sup>く<sup>と</sup>と<sup>と</sup>  
<sup>し</sup>た<sup>ら</sup>ぬ<sup>の</sup>で<sup>心</sup>を<sup>な</sup>り<sup>ま</sup>し<sup>は</sup>是<sup>ら</sup>う<sup>か</sup>か<sup>小</sup>識<sup>の</sup>く<sup>く</sup>  
<sup>あ</sup>い<sup>る</sup>み<sup>で</sup>心<sup>を</sup>な<sup>り</sup>ま<sup>し</sup>。あ<sup>ま</sup>り<sup>長</sup>く<sup>も</sup>な<sup>り</sup>ま<sup>し</sup>を  
<sup>先</sup>の<sup>席</sup>は<sup>と</sup>も<sup>さ</sup>ら<sup>う</sup>に<sup>い</sup>く<sup>ま</sup>ん

心學道の話初篇畢

天保十五年甲辰春刻成 廣陵 花蹊堂

心學道の話二篇 全三冊 出板

同 三篇 全三冊

京都錦小路駄屋町東江入

伏見屋祐七郎

江戸日本橋南壹町目

須原屋茂兵衛

大阪農人橋通谷町西江入

本 屋吉兵衛

藝州廣島中島本町

世並屋伊兵衛

書肆

